

震災と文化・芸術

～震災の被害を受けた幼児、小学生の芸術療法プログラムの実践研究～

研究代表者 芸術による地域創造研究所 所長 渡邊 晃一

1. 調査研究の目的

震災の被害を受けた幼児、子どもたちにたいする芸術療法プログラムとして、「鯉アートのぼり」をテーマにした活動を実践した。

「鯉のぼり」は「鯉の滝昇り」という、子どもたちの立身出世、成功祈願の意味を込め、江戸初期から描かれてきた最も古い図柄の一つから生まれた。鯉は里の魚。里は「田（農地）」の神を「土（杜）」で祭る意味がある。急流の滝を昇りきる鯉は、登竜門をくぐり、天まで昇って龍になる「登竜門」（古代中国の故事）を元に、江戸中期には、庶民が絵幟の「鯉の滝昇り」から吹流しの「鯉幟」を開発した。福島県では今も端午の節句に肉筆（手描）の「幟旗」を飾る伝統があり、福島県指定の伝統的工芸品となっている。

鯉が龍となるように、明日に向かって昇るエネルギーを、子どもたちと一緒に育んでいく象徴的な意味合いを持つ本テーマをもとに、避難所や学校園でワークショップを開催した。放射線の心配から、子どもたちが外に出ることが難しい状況下で、ワークショップを通して、子どもたちの内なる思いを発露させると同時に、避難所にいる子どもたちが互いに関わりをつくる活動を行った。

2. 調査研究組織

<研究代表者>

芸術による地域創造研究所 所長 渡邊晃一

<研究分担者>

芸術による地域創造研究所 連携研究者
 福島県立博物館・主任学芸員 川延安直
 福島県立美術館・主任学芸員 増淵鏡子
 福島県立美術館・主任学芸員 橋本淳也

3. 調査研究計画・方法

1) 避難所、学校園に飾った「鯉アートのぼり」

福島大学の体育館、福島市南体育館、あづま総合運動公園、福島市立佐原小学校、さくらんぼ保育園など、避難場所、学校園を訪問し、支援物資となる絵本や画

材を選び、学生と一緒にワークショップを開催した。

「鯉アートのぼり」のワークショップは、学生が子どもたちに話しかけ、暖かく丁寧な対応を繰り返す中で、参加する子も増えていった。絵を描くことを躊躇していた子もエンジンがかかると、自分も色を塗りたい、ウロコを貼るといって、積極的にのめりこんでいった経過がある。また本活動を振り返ると、低学年の子どもたちは、クレヨンや絵の具を使用し、色鮮やかにスクリブルで描いていたが、年齢を増す毎に震災時のCMで頻繁に流されていた言葉やキャラクターを描く子が多くなった。「がんばろう！日本」「放射線出ていけ！」という語も多く見られる。

福島の街なかには「がんばろう！日本」と大量に印刷された旗が飾られている。「鯉アートのぼり」の制作を続けていくうちに、一人一人の思いのこもった個性的な旗幟で福島の町なかを飾り、彩りたいという意見を多く受け取るようになった。子どもたちの個々の作品に込められた思いから、福島の内外に交流をはかることを可能とするのではないかと。福島住民にとって余震や放射能という「目に見えないもの」の影響、不安な気持ちを、美術という「目に見えるもの」の力によって勇気づけ、支援していくことを考えた。

本企画は「鯉アートのぼり」のホームページや「ART for Life」という震災支援活動のブログ、INSEAなどの学会を通して紹介した。その結果、一ヶ月弱の短い準備期間にも関わらず、世界各地からメッセージが寄せられた。国際的な美術家の方々からも多数の作品を拝受し、当初予定していた数をはるかに超えた、約1000点近い作品が集まった。

① 4月5日 福島大学体育館（避難所）

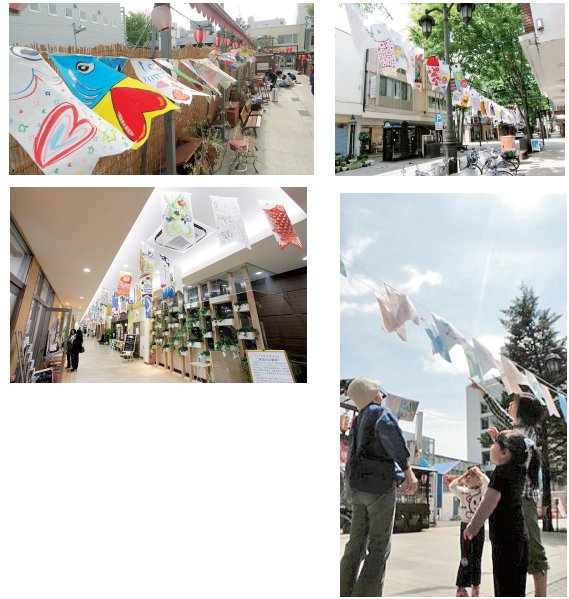
協力：福島大学の諸先生（中田スウラ、原野明子、谷雅泰、鈴木典夫ほか）



② 4月16日 あづま総合運動公園総合体育館
協力：群馬大学、桜の聖母短期大学



避難所や福島市街地に、子どもたちを励ます幟旗の
「鯉アートのぼり」を飾った。



③ 4月18日、25日 さくらんぼ保育園
協力：さくらんぼ保育園



④ 4月18日、20日 福島市立佐原小学校
協力：福島市立佐原小学校



2) 福島市街地に飾った「鯉アートのぼり」
展示：福島市街地
(駅前通り、パセオ通り、ふくしま屋台村、パセナカ
Misse ほか)



3) 「鯉のぼり」のファッションショー
5月21日 あづま総合運動公園
協力：奈良美智



「鯉のぼり」の鮮やかな色や形をいかして、子どもたちの衣装を作成。着付けの後、写真を撮り、プレゼントするワークショップを開催した。以前、支援活動に参加された家族の方から、震災の津波で子どもたちの記念写真が失われた話や、着飾ったり化粧する機会もないという話を伺い、本企画を立てることとなった。

4) 「鯉のぼり」の衣裳を着たダンスワークショップ

5月29日 あづま総合運動公園

協力：館形比呂一（舞踏家）、一美組



子どもたちと一緒に踊るワークショップを開催した。参加者は、とても気持ちがよく、心が発散する楽しい時間を過ごすことができたと言っていた。

5) 「鯉アートのぼり」の展示会とワークショップ

福島県の公的機関等の依頼で、様々な会場で「鯉アートのぼり」のワークショップと展示会を開催した。

①「あそ VIVA☆びじゅつかん」

8月12日～9月4日 福島県立美術館

協力：ブロンズ新社、ギャラリーはねうさぎ（京都）



一緒に絵本を読んだり、簡単な造形活動ができるプレイルームを設営。放射線の不安が続く中、美術館の安全な空間に、こどもたちが安心して遊べる場を作った。下図は《鯉アートのぼり》の展示室

② BASCAFE

5月4日 会津若松市

協力：福島県立博物館、工藤稜（イラストレータ）



③フェスティバル FUKUSHIMA!

8月15日 福島市四季の里

協力：FUKUSHIMA! 実行委員会、大友良英

福島で生まれ育ったゆかりの音楽家や詩人の有志を中心に、開催されたフェスティバル。会場で展示とワークショップを開催。

④ I, CULTURE

10月8日～16日 東京芸術大学上野キャンパス美術学部

協力：東京芸術大学、モニカ・ヤクビアック



「I, CULTURE」とは、ポーランド人ファッションデザイナー、モニカ・ヤクビアックが指揮をした、世界12都市をまたぐ国際文化交流プロジェクト。伝統文化と現代の試みを紹介する様々な国際的プロジェクトを世界に向けて発信している。

⑤沖縄ぶんかテンプス館

10月12日～10月13日 沖縄県那覇市

協力：国際水中アートフェスティバル



第5回世界のウチナーンチュ大会のなかで、展示とワークショップを開催。「世界のウチナーンチュ」（方言で「沖縄の人」のこと）は、5年に1度、母島の沖縄県で企画されるイベント。本企画で展示とワークショップが開催された。

⑥喜多方大和川酒蔵北方風土館

11月5日 福島県喜多方市

協力：ままでの会プロジェクト「ままでの心」



楽しみながら制作した思い思いの鯉のぼりが次第に増えていく様子に、参加者の誰もが元気づけられたと語った。

⑦福島こどものみらい映画祭

11月19日 会津大学

協力：東京都による芸術文化を活用した被災地支援事業



今回の「鯉アートのぼり」の活動は県内外の新聞やテレビ、雑誌等で多数紹介された。本企画を通して、土地との関わりの中から、時代の風俗や思想を反映した新たな「風」を感じる機会を子どもたちと共有したいと考えた。文化活動の背景には、人間が人間であることを支える「生命」への尊厳と始源の姿が色濃く反映されている。子どもたちが個々に制作した作品、福島に集められた「鯉アートのぼり」は、震災後の福島の文化を世界に伝達する契機ともなる。

子どもたちの体温を感じられる活動、そしてLife（生きること）をつなげていく活動として、今後とも長期的に継続していきたい。

4. 経過や結果（まとめ）と今後の展望



震災の被害を受けた幼児、小学生の芸術療法プログラムの実践研究
～ 「Koi 鯉アートのぼり」プロジェクトからの一考察 ～



渡邊晃一(芸術による地域創造研究所)



東日本大震災の被害にあった子どもたちを支援するプログラムとして、福島市街地を中心に、保育園、小学校、避難場所となった諸施設において行われた芸術活動の実践研究。

「鯉のぼり」をテーマに作品制作や、 美術家の奈良美智さん、ダンサーの館形比呂一さんを招き、ファッションショーやダンスのワークショップを開催した。

災害支援と重ねていかに芸術の側面から心のケアをサポートできるのか、地域連携活動によるワークショップや展示活動の取り組みを通して考察した。

【お問い合わせ先】

960-1296 福島市金谷川1 福島大学研究協力課
TEL:024-548-8009 E-mail: kyoudo@adb.fukushima-u.ac.jp